

とちぎ夢大地応援団第2回カレッジ活動報告(令和元年12月21日実施)

大田原市 両郷地区「イチゴハウスの管理作業」

12月21日(土)、栃木県大田原市両郷地区にある「ガーデンハウス3びきの子ぶた」で、令和元年(2019)年度第2回「とちぎ夢大地応援団カレッジ活動」を実施しました。宇都宮市の帝京大学経済学部(2019)の学生と教職員合わせて12人が参加。同農園のイチゴ苗栽培用ハウスで、イチゴ苗の管理作業を体験しました。

カレッジ活動は、未来を担う若い世代に、農作業や農村資源の保全活動を体験してもらい、農業資源の保全活動を体験してもらい、農業・農村の果たす役割について理解を深めることが目的です。県内の大学や短大、高校生などが参加して、毎年、各種の活動に取り組んでいます。

この日、作業に携わったのは、帝京大学経済学部地域経済学科の学生たち。農山村をはじめ地域が抱える課題解決に向けて勉強しています。今回は農作業を実際に体験できる貴重な機会として参加しました。

イチゴ苗の管理作業は、学生たち全員が初めての経験。同農園の職員らの指導を受けながら、県北のイチゴ農家さんにイチゴの親株供給しているハウス5棟のいちご苗の親株廃棄作業を行いました。大きなはさみを使って手の力のいる仕事ですが、若いだけあって弱音を吐くこともなく、手際よくこなしていました。

大田原市出身の1年生の吉成菜里さんは「農作業自体がほとんど初めてで、想像以上に大変。高齢化など農業が抱える課題も勉強しているが、その苦労が実感できた」と感想を語りました。



▲参加した皆さんで記念撮影を行いました。肌寒い天候でしたが若い力で作業もはかどりました。



はじめに、栃木県農村振興課土屋氏より、御挨拶をいただきました。

地方の農村では、若者に対する期待値が大変高く、呼び込みに必死になっている。今回作業を体験することで、農山村の現状を知って欲しいと語りました。



施設を管理する益子さんから、実演を交えた作業方法を解説いただきました。

「わさび根はこのように切り取ってね」と分かり易く説明してくださいました。

ハウス内は比較的暖かく作業はやりやすかったと思います。



枯れ葉からホコリが舞うので、マスクをしながらの作業となりました。

普段は、地元のおばあちゃん達が、足台を添えて、体を伸ばしながらの作業だそうです。農作業ははじめての生徒さん達も、慣れない様子でしたが、次第に慣れ、どんどん作業がはかどります。



昼食時間時の一コマです。

農家さんから心のこもったおもてなしを受けました。地元産のお米と野菜をふんだんに使ったおこわにピザ、豚汁、煮卵など。とてもお腹一杯になりました。

同時に意見交換などもでき、農村と都市部に住む人たちの交流が図れました。